

団長の独り

「夏の夜空へ」成功までの軌跡4

初日の朝、全員が元気に顔を揃え、健康状態も見るとは良好そうで、これでなんとか幕を開ける事は出来る！という中、場当たりは不安要素もなく一通り終わり、約1時間の休憩の後、「ゲネプロ」となる。

ゲネプロというのは、ドイツ語のゲネラル・プロベの事で、日本語に訳すと、「総合的な稽古」という意味らしく、日本では、照明も音響もメイクも衣裳も本番と全く同じ状態で通す「最終通し稽古」の事を言う。

つまりは、お客様がいないという意外は本番と同じなので、セリフをとちろうが、舞台転換が間に合わなかつた、とにかく最後まで続けなさいけない。役者はこのゲネプロで自分の立ち位置や出ハケの最終確認をし、照明、音響、舞台転換等のスタッフさん達も最終確認を行うので、本番と同じような緊張感がある。

1ベル、アナウンス、2ベル、生演奏が始まる……全て本番通り。

ピリッとした緊張感漂う幕開き。役者達は舞台袖等に待機。

私はと言えば、私演じる「木島」の出番が1幕の後半からなので、客席の一番後ろの席に座って観客視線となり、じつりと幕開きから観させてもらう。

幕開きのピアノ、ヴァイオリンに合わせ、「旅館・希望の星」にあたる照明の変化がめっちゃめっちゃきれい！オーブニングが終わると、真つ暗闇の中にセミの鳴き声……外は真冬だけど、劇場は「夏」つてのをセミの声が教えてくれる。

やがて明かりが入り、芝居が始まる。出演者達は、「ゲネだから」って事で、力を抜くなんてことはせず、本番どおり！パワフルに演じ、照明も音響も全てパーフェクトだったのだが、相変わらず劇場内がやけに寒い。

これは劇場入りした時からそうなんだけど、どうやら麻布区民センターの空調の調子が、以前から相当悪いそうで、3月に修理業者が入るとのこと……。

一番寒い1月、2月に対応出来ないとは！しかもよりによって、初日、中日、そして千秋楽の3日間は、今季最大の寒波が日本列島を覆う！そんな極寒の中、お越しいただいたお客様が、劇場内でさらに寒い思いをされては、芝居にも集中しきれない可能性がある。

麻布区民センター事務局に「なんとか温かくならないか？」と直接伺っても、不具合は不具合なので、どうすることも出来ない……というだけ。

民間の劇場では、空調の不具合は命とりなので、「3月までには……」なんて悠長な事は言わず調子が悪ければ即対応するはず。

お客様の立場でつねに芝居を創ってきた我々としては、「寒い中」観劇されるお客様の気持ちを考えて、いたたまれなくなる。

しかし温かくならないのはしょうがない。我々はお客様が寒さを忘れるほどの熱意ある芝居をお届けするのみ！そんな事を思いながら、私は化粧前の己と向き合う。

みなは楽屋や舞台面で、思い思いの時間を過ごし、17時45分、お客様がご入場の時間となると、待つてました！とばかりに続々とお客様が、ご入場される様子が楽屋にいても伝わってくる。

緊張感が増す！もう逃げられない。（もともと逃げる気はさらさらないが）

18時25分、舞台裏の廊下に全員集合して円陣を組み、大きく伸ばした右手を重ね合わせ、「いぐぞ」「おう」と声を合わせ、各自が舞台袖にスタンバイ18時30分、ついに「夏の夜空へ」麻布公演が始まった。

どの役者も落ち着いている。

うん！いいぞ、いいぞ！テンポもいいし、何より全員がノリノリなのがいい。

そのノリノリの中、1幕も後半に差し掛かるころ、私演じる「木島」が登場。

みんなの熱意に負けないように、無我夢中で演じて、楽屋に戻れば台本を開き、その都度次のセリフの確認をして、「落ち着いて」と自分に言い聞かせながら、

頼もしい共演者達の芝居に感動しつつ、ひたすら「木島」になり、叫んで動く！動く！動く！

客席からは、笑い声等も起こり、お客様が楽しんで下さっているのが舞台上にいてもよく分かり、そのお客様に役者達もさらに乗せられて、ラストシーンの決めるべきところで、役者、照明、音響がピシッ！と決め、感動的な拍手をちょうだいし、初日は無事終了した。

カーテンコールで、舞台上からお客様にご挨拶をする際、皆さんの服装に目をやると、ジャンパー、コート、マフラー姿ではなく、ちゃんと上着は脱がれてご観劇になられているようだったので、幸いにして、館内エアコンのご機嫌がまあまあ良かったみたいだと、ホッとする。

終演後、ロビーにて、お客様のお見送り。楽しんでいただけたかな？という感触。家に帰ってアンケートを拝見し、皆様が楽しんでくださったのが伝わり、まずは良かったと胸をなでおろすが、明日は昼夜の2回公演、そしてさらに明後日の日曜日まで公演は続く。

なか卯で、うどんと親子丼のセットを食べて、風呂に入って爆睡するのでした。